

# マルクスの誤算か、それとも、俗流学者の誤算か？

## —「東欧大変動」が生みだした貴重な告白—

山 本 二三丸

- |  |   |
|--|---|
| <p>まえがき</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 誇大な前口上</li> <li>2. 社会主義・共産主義についての初歩的知識の欠如</li> <li>3. えせ「社会主義」社会崩壊の必然性とその世界史的意義</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 俗物的思考の特徴を示す典型的事例               <ol style="list-style-type: none"> <li>イ) 歴史的発展法則についての無知と無理解</li> <li>ロ) マルクス理論の完全・無欠な没理解</li> <li>ハ) 資本主義社会の本質についての驚くべき無知とその俗物的粉飾</li> </ol> </li> </ol> <p>簡単な要約</p> |
|--|---|

### ま え が き

1989年は、まさに世界史において特筆されるべき年であったといえる。これまで威容を誇っているかに見えた東欧の「社会主義」諸国は、つぎつぎとまことにぶざまな「崩壊」をとげていったのである。それは、まさしく、ジョン・リードの名著『世界を震撼させた十日間』がわれわれに与えたのと同じほどの強烈な衝撃を全世界の人々におよぼしたのである。それは、一方では、これまでひたすら前衛党の言いなりになってマルクス主義を信奉してきた善意の人々にとっては、そのよって立っていた地盤が足もとから崩れ去ってしまったことを意味するものであったが、これに反して、他方、これまでマルクス主義にたいして敵意をもち、なんとかこれを批判しようと思いつつ、その能力の欠けていた連中にとっては、まさに願ってもないマルクス主義攻撃のための絶好の口実が授けられたものとならなければならなかった。それゆえ、前者の人々は、おそらく黙して語らずということになるはずであるが、後者は、「この機を逸せず」、マルクス攻撃に乗り出すであろうと予想されたのである。果たせるかな、そのマルクス攻撃の本がはやくもこの日本に現われたのである。1990年4月に出された『マルクスの誤算』と題する本は、大学教授4人と評論家1人の計5人がそれぞれ短い論文を書いて、これらを寄せ集めて一本に成ったものであるが、その特異な表題そのものによってもすぐわかるように、そのなかの論稿は、直接にか、または婉曲にか、マルクス主義と共産主義なるものの批判、またはその「敗北」を謳ったものばかりである。とりわけ、その巻頭を飾る歴史学者林健太郎氏の論文は、このさい「宿敵」マルクス主義を殲滅しないではおかしいという意気込みが先立って攻撃の字句ばかり並んでいるような感じさえ読む者にあたえかねないと思われるようなものである。わたくしは、その他の執筆者諸氏からみていわばその総指揮官ともいうべき位置を占

めている林氏がその巻頭に載せている論文について、それが科学的理論の見地からみて、はたして正鵠を得たものであるか否かということ、しばし検討してみたいと思う。われわれが、開巻早々驚かされるのは、その論文の見開きに、論題を中心として特別に大書・表示されている四行の文句であるが、それらは、まことに「鬼面人を驚かす」ていのもので、そこに示されている「倨傲」という文字は、むしろこの四行から成る氏の「前口上」そのものの自体の性格を示すために用いられたのではないかとさえ、思われるものである。そこで、私は、はじめにこの「倨傲の前口上」がどんなものかということ、読者諸君とご一緒にみておきたいと思うのであるが、私にはひとの目をくらます難解な漢字をひけらかすほどの強心臓はないので、ひらたく「誇大な前口上」という表現をつかうことにしたのである。

## 1. 誇大な前口上

読者は、開巻最初にその目に飛びこんでくる『『倨傲の宗教』の終焉』という難解この上ない字句に驚かされるが、辞書によって「倨傲」とは「おごりたかぶること」であること、そして、この「鬼面人を驚かす」ていの表題の横に麗々しく、「神なき救済を説いて、結局は人間を神の位置に据えた「倨傲の宗教＝マルクス主義」は敗れた。が、新たな倨傲性の哲学の現われることを、私は怖れる。」という文句がかかげられていることを知れば、わが歴史学者林氏がこの「倨傲」そのものである表題のもとにその論文でなにを主張しようとしているかということとは、たやすく察しがつくのである。氏が極力主張するのは、

- 「1. ソ連や東欧諸国は、マルクス主義理論をそのまま実現した共産主義社会であり、
2. それらの共産主義諸国が崩壊したことは、もともとマルクス主義が科学的なものでなく、「倨傲の宗教」でしかなかったから当然に敗北し、最期をとげなければならなかったことを実証するものである。」

ということ、ただこれだけなのである。

林氏はこの二つのことを読者にのみこませようとして、そのありったけの蘊蓄を傾けるのであるが、蘊蓄が誇示されればされるほどボロが出てくるという、まことにみじめな結果があらわれてくるようである。そこで、その蘊蓄のほどを簡単にみてみよう。

## 2. 社会主義・共産主義についての初歩的知識の欠如

社会主義・共産主義という言葉が、思想とか観念体系を示すものではなく、ある特別の規定をもった歴史的な社会組織を示したものであることは、問題のないところであり、またその意味内容は——したがって概念規定としては——マルクスによってはじめて厳密に、いうなれば歴史科学的に、与えられたものであることは、言うまでもないところである。ところが、歴史

学の分野ではひとに知られているはずの林氏は、この社会主義・共産主義についてマルクスが与えている本質規定の内容を、まったく読まなかったか、読んでもわからずきれいに忘れてしまったか、いずれにしてもまったく知らないのである。こう言うと、真面目な読者諸君は、そんなことはありえないことだとして、私の判断に異論を唱えられるかもしれないので、まず、林氏がどんなことを主張しているか、事実には則してみることにしよう。

「地球の三分の一を覆った共産主義」と題する最初の小節のなかで、林氏は、まず、「東ドイツからバルカンに至る東欧の地域が共産化したか、アジアでも先ず北朝鮮、次いで中国という巨大国家が共産国となったので、共産主義の地域は地球の六分の一から三分の一の面積に拡大した。」(13ページ。以下、本論稿の注記で示されたページ数は、とくに出典名のないものは、すべて著書『マルクスの誤算』の出所を示したものである)。

と述べ、つづけてこう論じている。

「これらの国々は一党独裁と国家による全面的計画経済を特徴とするが、この社会体制を彼らは社会主義と称し、ソ連の正式国名もソヴィエト社会主義共和国連邦である。これはマルクス・エンゲルスが彼らの思想を共産主義とも社会主義とも称したことによる。他方曾てマルクスが『ゴータ綱領批判』において「共産主義社会の第一段階」と称したものを社会主義と呼ぶ使い方もかなり一般に行われている。しかしここではこのような言葉の論議には立ち入らない。先ずは共産主義者にとって共産主義が本当の社会主義であり、社会主義と共産主義は同義語だとしてよいであろう」(13-14ページ)。

社会主義と共産主義とを「同義語」としてみることは、この言葉を用いる当事者の勝手であるが、しかし、共産主義社会の第一段階とそのより高い段階とが同じものだという事は許されない。この第一段階と第二段階との本質的区別を明確にしなければ、どのようにして資本主義社会から、より高度の、共産主義社会に発展してゆくかという、人間社会の歴史的発展過程を正しく認識することはまったくできない。今日では、レーニンが定めたように、共産主義社会の第一段階のみを社会主義社会と呼ぶことが一般に認められ、社会主義社会は共産主義社会の第一段階の別名であるという考え方が定着しており、事実必ずそのような意味でこの用語の使用が認められているのであるから、「社会主義と共産主義とは同義語だとしてよいであろう」などと言うのは、共産主義社会の本質規定とその発展法則とを精確に把握することが本来の重要課題であるべき歴史学者たるものとして、あるまじき暴言といわざるをえないし、また、見方によっては、その重要課題がどんなものかがまったくわからない俗物的斜視を体よくごまかすための口上とも受けとられるのである。

いずれにせよ、林氏は、共産主義社会の二つの段階の本質的特徴をこの上なく明確に示してくれているマルクスの『ゴータ綱領批判』の書名だけは挙げてみせているのであるから、その肝心の本質的特徴の記述は、その目にもその頭にもはいりえなかったことは確かである。そこで、林氏が読みとれなかった肝心のところを次に引用してかかげることにしよう。

「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会の内部では、生産者はその生産物を交換しない。同様にここでは、生産物に支出された労働がこの生産物の価値として、すなわちその生産物にそなわった物的特性として現われることもない。なぜなら、いまでは資本主義社会とはちがって、個々の労働は、もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである」(Marx-Engels Werke, Bd. 19. S. 19-20, 訳大月版19ページ, 傍点—マルクス)。

ここに述べられている本質の特徴は、いうまでもなく、共産主義社会一般の、つまりその低い第一段階にもより高い第二段階にも妥当する共通の本質規定を示したものである。マルクスは、そこで、さらに立ちいって、歴史的にみてまず問題となるべきその第一段階について、さらにより精確な特徴づけを示しているのである。

「ここで問題にしているのは、それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなくて、反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだ帯びている。したがって、個々の生産者は、彼が社会にあたえたのと正確に同じだけのものを——控除をしたうえで——返してもらう。個々の生産者が社会にあたえたものは、彼の個人的な労働量である。たとえば、社会的労働日は個人的労働時間の総和から成り、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日のうちの彼の持分である。個々の生産者はこれこれの労働（共同の元本のための彼の労働分を控除したうえで）を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段を引きだす。個々の生産者は自分が一つのかたちで社会にあたえたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである」(ibid. S. 20. 訳大月版19-20ページ, 傍点—マルクス)。

では、そのより高い段階の本質の特徴はどうか、といえ、これを示してくれているのが、次の比較的より有名なくだりである。

「共産主義社会のより高度の段階で、すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となったのち、個人の全面的な発展にともなって、またその生産力も増大し、協同的富のあらゆる泉がいっそう豊かに湧きでるようになったのち——そのときはじめてブルジョア的権利の狭い地平線を完全に踏みこえることができ、社会はその旗の上にこう書くことができる——各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」(ibid. S. 21. 訳大月版21ページ)。

以上引用した文章は、当時もっとも先進的といわれたドイツの労働者党のすぐれた指導者たちにたいしてマルクスが懇切丁寧に教示したもので、正常の理解力をそなえた者ならば誤り読むことは考えられないものである。ところが、自称歴史学者の俗物などは言うにおよばず、マルクス主義前衛党の指導者をもって任じている面々にさえ、その文字をまともに読むことすら

できず、また読んだとしてもその重大な意味がさっぱりわからないという現状であるので、蛇足ながら、その要旨をわかりやすく、箇条書きにして示してみよう。

まず、共産主義社会一般の本質的特徴

1. 生産手段の私的所有はすっかり清算されて、完全な社会的所有が実現されている。
2. したがって、各成員の労働は、社会的に組織された結合労働としてのみ行なわれ、私的労働はもちろんのこと、個人的・個別的労働もありえない。
3. したがって、社会的労働の生産物はすべて社会の取得するところとなり、その処分は社会的に、その一部はまず社会的必要充足に、他の一部は各成員個人の必要充足にあてられるべく、社会的に分配される。
4. 私的所有も私的労働も存在しないがゆえに、商品も貨幣も、まったくありえない。

これら簡単自明の本質的特徴をりっぱにそなえた歴史的社會がはじめて共産主義社會の名に値するものであって、それらの特徴の欠けた社會は、たとえ世界中の人間が共産主義社會だと広告宣伝しようとも、それはにせの、できそこないの括弧つき「共産主義社會」であるという事実は厳として変わらないのである。

では、なぜ同じ本質的特徴をそなえた共産主義社會をそれぞれ異なった特徴をもつ二つの段階に区別するのか、いや区別しなければならないのか、といえ、それは、資本主義社會と完成された高い段階の共産主義社會とは、その内容もまったく違っていて、とりわけ肝心の主体である人間そのものが隔絶しているからであり、資本主義社會から一挙に簡単に飛び移るなどという芸当はとうてい実行できないからである。

資本主義社會では、人間はみな貨幣の奴隷となり、お互いに弱肉強食の生存闘争のなかで私的利益を守り追求しなければ生きてゆけない、動物世界にも見られない、利己主義第一の動物的存在である。人間の本質的特徴である精神的能力は肉体的能力と引き離され、どちらもねじゆがめられ、物欲と因習にひきずりまわされる、みじめな生活を強いられている。ここでは、「一人は自分個人のために、万人も自分個人のために」という、浅ましいかぎりの、動物以下の規範が、動物的生存状態をしめつけている。では、共産主義社會のより高い段階ではどうか、といえ、そこでは、人間がまったく違っているのであって、それがどんなにか隔絶していて真の人間の名に値するものがはじめてその社會をつくりあげうるものだということを明示しているのが、さきにかかげたマルクスの文章なのである。すべての人間がその精神的能力と肉体的能力とを、調和を保って高度に発展させることができ、またそういう能力をりっぱにそなえている人間から成っている社會、そこでは食うために働くのではなく、労働力を均衡を保って流動させるという労働そのものが第一の生命欲求となっており、簡単で苦痛の多い肉体労働に一日中しばられるとか、一面的な頭脳労働に拘束されることも、遊んでいてしこたま儲けをふところにいれて他人をこきつかうなどという、曲がった真似なども、夢にみることもすらできず、その全面的に発展した労働力を「楽しみ」として流動させ、「一人は万人のために、万人は万

人のために」という、動物世界を超えた真の人間社会の名に値する世界がはじめて築きあげられているのである。この真の人間社会に、動物以下的な資本主義社会から、一挙に、——たとえ一人残らず賛成したとしても——飛び移れるであろうか？ 資本主義社会の、歪められた労働力と利己主義のかたまりを守って、文字通りの動物以下的な奴隷的存在として生きつづけている人間が、いったい、どのようにして、上に述べたような真の人間の名に値する共産主義社会の人間に生まれ変わることができるというのか？

歴史学者と称されるわが林氏は、マルクスの「唯物史観の定式」の最後におかれた、

「しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがってこの社会構成〔近代ブルジョア的生産様式〕でもってこの人間社会の前史は終わる。」(ibid. Bd. 13, S.9. 訳大月版7ページ)

という文章から「前史」という言葉をそのままひきぬいてきて、

「……労働者は、……資本主義社会を破砕して一切の対立をなくして、人類の前史から未来史に、必然の王国から自由の王国に移行させる力を持っているという固い信念」(32—33ページ)が、「マルクスの思想の根本をなすもの」(32ページ)

であったと、得々として述べたてているが、この「前史」にたいして「未来史」を対立させていること自体、氏自身が前史の意味がまったくわからず、「時間的に前の時代」だなどと受けとっていること、つまり、人間社会の本質について、なによりも決定的なことは肝心の人間そのものの本質について、正常な理解ひとつすら持ち合わせていない、骨の髄からの俗物的「学者」でしかないことを如実に示しているのである。

動物世界以下的な資本主義社会を変革して真に人間社会の名に値する共産主義社会を築きあげるための肝心の主体は、労働力を担っている本当の人間＝労働者の階級であり、それがまず不労・寄生的階級の独占する生産手段を収奪して社会的所有に移すことによって、共産主義社会の経済的土台を確立しなければならず、すべての人間を等しく労働力を正しく流動させる人間にし、私的所有・私的労働を、したがって、商品交換を廃絶し、貨幣を一掃して、貨幣への隷属からすべての人間を解放しなければならないが、しかし、この段階の「協同組合的」社会、つまり低い段階の共産主義社会では、級対立をなくしすべての成員が労働する人間になったとはいえ、まだ労働の生産力も低く、一面的労働にしばりつける旧社会の分業組織も残っており、なによりも重要なことは人間を完全に支配していた個人主義・利己主義も、「一人も、万人も、すべて自分個人のために」の観念も根強く残り、しかも、これに応じて、「労働に応じての分配」という、ブルジョア社会で支配していた権利の原則も生きているのである。このような、個人主義とブルジョアの権利意識を担った労働者を全面的に改造して、すべての成員を、さきに示されたような、真の社会的人間の名にふさわしい共産主義的人間につくりあげるには、いったい、どれだけの並々ならぬ骨折りと長い時間が必要であろうか。

マルクスは、人間社会の仕組みとその歴史的発展の法則について厳密・精確な科学的考察を

することができたからこそ、社会主義革命によってブルジョアジーの権力を打倒し、生産手段を全部社会的所有に移すことができて、共産主義社会のより低い、第一段階にすぐさま簡単に移行できるものではなく、そこには旧搾取・寄生支配階級一味の反革命的策動を弾圧することからはじまって、全国民経済を計画的に運営する機構と組織とを整備して、商品交換を廃絶し貨幣を完全に追放するという大事業にいたるまで、たとえ数世紀にもわたる献身的な努力・奮闘をもってしても解決しがたいような課題が山積していることを正確に見通して、社会主義革命の勝利から、共産主義社会の第一段階にいたるまでの歴史的時期を過渡期として規定し、つぎのようにこれをはっきりと——『ゴータ綱領批判』のなかで——解明しているのである。

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない」(ibid. Bd. 19, S. 28. 訳大月版28—29ページ、傍点—マルクス)。

マルクス＝エンゲルスのうちたてた科学的社会主義の理論を継承したかのレーニンが、どんなに傑出したマルクス主義理論の体得者であり、どんなにすばらしくこれを適用し発展させて、真の人間社会＝共産主義社会建設の道を築きあげるために献身的に奮闘しえたほとんど唯一の指導的人物にはかならなかったかということは、レーニンが十月社会主義革命を勝利に導いたあと、彼の死にいたるまで、その全精力を過渡期の困難な諸課題の解決に注いだこと、そのためにありとあらゆる謬論・逸脱と闘争して、数えきれないほど多くの重要な労作をわれわれに残していることをみれば、このうえなく明瞭にわかるのである。このマルクス主義の傑出した継承者レーニンの著わした重要な労作に目を通すことを惜しみながら、マルクス主義を云々する手合いは、まったく恥しらずのインチキ詭弁家としか言いようのないものであるが、つぎに真面目な読者ならば、必ず目を通さずにはおかないレーニンの主要労作のうちから、有名な叙述部分を引用してみよう。これは1918年、十月革命後ただちに共産主義社会に移れると考えるような尻ぬけ共産党員があまた伏在していることを承知の上で、それらの手合いにやんわりと鉄槌を下したものである。

「ロシア経済の問題ととりくみながら、この経済の過渡的な性格を否定したような人は、まだなかったようである。どんな共産主義者も「社会主義ソヴェト共和国」という表現が、社会主義への移行を実現しようというソヴェト権力の決意を意味するものであって、けっして新しい経済秩序を社会主義的なものと認めることを意味するのではないということも、一人として否定しなかったようである」(В.И. Ленин, Сочинения. том 27, стр. 302, 訳大月版338ページ、傍点—山本)。

また、1917年十月社会主義革命以後において、レーニンが発表した重要な論文・演説のどれをとっても、レーニンがそのなかで、

「ロシアは、いまやと社会主義に向かって最初の一步を踏み出したばかりにすぎない。今後ロシアが社会主義に到達できるまでには、長期にわたる、困難で障害の多い歴史的な一時代

を経なければならない。」

と、くりかえしきつくいましめていることを容易に知ることができる。社会主義革命による権力の掌握と生産手段の国有化とは、資本主義社会を完全に変革してさきに示したような本質的特徴をそなえた社会主義社会、つまり共産主義社会の第一段階に向かって進むための基本的要件にすぎないのであって、このような過渡期の第一歩を踏みだしたばかりの社会をとらえて、どうしてそれが社会主義であるなどといえようか？

ところが、わが歴史学者は、ソ連と東欧諸国を目して「共産主義国」であるとか「共産主義体制」だとかくりかえし言いたてて、さも鬼の首でもとったかのように、

「これらの国々は一党独裁と国家による全面的計画経済を特徴とするが、この社会体制を彼らは社会主義と称し、ソ連の正式国名もソヴィエト社会主義共和国連邦である。」(13ページ)

と強調しているのである。

この主張ほど、本人がレーニンの重要な労作をひとつも読んでおらず、また、マルクスの『ゴータ綱領批判』のなかの共産主義社会に関する的確な叙述にも目を通さず、したがって、共産主義社会の本質的特徴に関する知識も、またソ連・東欧諸国の現実の事態についての一片の知識もなく、ひたすらジャーナリズムの雑記事でさかんに用いられている「ソ連共産主義国」とか「東欧社会主義諸国」とかいった、見当違いの形容語だけを唯一の知識源泉として、つまり手間いらずのもっとも安直に手にはいるねただけを利用していること、このようなでたらめな形容語をひねくってマルクス主義をやっつけ、共産主義を攻撃しようと企んだものに相違ないという、事の真相を如実に教えてくれるものはない。ジャーナリズムの愛好する見当違いの形容語を唯一のねたとして、歴史的事実についても、動かしがたい資料についても、いっさいかえりみることなく、見当違いの形容語ひとつで、たちまちマルクスをやっつけ、共産主義をやっつける宣言文をでっちあげるとは、また、なんと、正真正銘のこの上ない「倨傲の歴史学者」であろうか！

レーニン亡きあと、自国および全世界の共産党・労働者党を思うまま操って、崩壊直前における——というのは崩壊の必然性を抱えた、ということであるが——ソ連邦および東欧諸国の状態をこしらえあげたのが、マルクス＝レーニン主義の基本原則をことごとくふみにじり、強力とテロルを駆使して、ヒトラーのそれとまったく同様の専制支配体制のをうちたてた「帝王」スターリンにはかならないことは、こんにち、歴史学者林氏を除いて、誰ひとり知らぬ者はいない。その徹頭徹尾反マルクス＝レーニン主義的事績の数々は、とうのむかしから周知のところであり、たとえば、いまから14年前に出版されてベスト・セラーとして多くの人々に読まれたヘドリック・スミスの好著『ロシア人』(Hedrick Smith; The Russians, 1976)や、同じく広く読まれたヴォスレンスキーの労作、『ノーメンクラトゥーラーソヴィエトの赤い貴族』(Mickael Voslensky; Nomenklatura—Die herrschende Klasse der Sowjetunion, 1980)について、その中の節の題目を拾い読みしただけで、正常な判断力をそなえている人であれば、ただちにわ



かるのである。そして、その論者が、いやしくも学者をもって任ずるほどの自信と実質とをそなえた人物であるならば、現今フランスで著名な有数の経済学者であり歴史学者であるシャルル・ベトレーンが多年にわたる周到・綿密な調査研究の成果として1974年から1983年にいたる10年の歳月をかけてはじめて出版するにいたった貴重な労作、『ソ連邦における階級闘争』(Charle Bettelheim; Les Lutttes de Classes en URSS.)全四巻を真剣に読んで、よりよく、いっそう刻明に、頭目スターリンがそのあくなき強力とテロルを駆使してでっちあげたソ連邦の体制が、そして彼の強力支配の下で隷従を強いられた東欧諸国の体制が、どんなにマルクス主義の基本原則をふみにじり、労働者・農民の抑圧・搾取の上に一部特権階級が——「共産主義的」指導層の偽名のもとに——君臨する文字どおりの反革命的・ファッション的なものであったかということを、はっきりと理解しない者は、おそらく一人もいないであろう。私がつぎの節で読者諸君に紹介する頭目スターリンの驚くべき恥しらずの事績の実例は、主として右のベトレーンの大著に拠ったものであるが、これらの徹底した反マルクス主義的悪業の数々は、こんなにちでは、そのほとんどが暴露されて周知のところとなっているといつてよい。ところが、わが歴史学者林氏は、おそらくこうした確実な資料に目を通すという、学者としての当然の義務などはどこへやら、なんの論証もなしに、ひたすら、ソ連邦と東欧諸国は、共産主義国である、それらはマルクス主義をそのまま遵守してそれを忠実に具現したものだと、けんめいに書きたて、声を大にして宣伝に精を出しているという有様である。こういう先生のために、林氏自身、「倨傲」という素人だましの難語をひけらかして、「倨傲の俗流学者」の実例を示すべく、わざわざ範を垂れて下さったのではあるまいか！

われわれとしては、右の事実を確認すればそれで事足りるので、つぎに、すでに——林氏を除いて——周知の常識ともいふべき、頭目スターリンの悪業について、とくに彼の反マルクス的理論と反共産主義社会の強力的構築について、簡単に事実を確認することにしたいとおもう。

### 3. えせ「社会主義」社会崩壊の必然性とその世界史的意義

はじめに、理論と実践との両分野において頭目スターリンがいかに無軌道にマルクス＝レーニン主義の基本原則を歪曲し、改ざんし、ふみにじったかということを確認するためにその顕著な実例を——紙幅の制約を考慮してごく手短かに——摘記してみよう。

まず、理論の分野で。

#### Ⅰ 史的唯物論の歪曲。

スターリンが1938年に発表した論文『弁証法的唯物論と史的唯物論について』は、マルクスがうちたてた唯物史観を全面的に変造したものであるが、この論文は全世界のすべての共産党・労働者党の批判をうけるどころか、絶讃を浴びたのである。マルクスの唯物史観の定式のうちの一つの重要な眼目、すなわち、「社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それ

がそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と……矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのとき社会革命の時期が始まる」という命題は、つぎのように、生産諸関係と生産諸力とのみごとな調和のとれた照応関係の主張に改ざんされている。——「まずはじめに、社会の生産力が変化し、発展して、そのあとに、これらの変化に依存し、これらの変化に照応して、人間の生産諸関係、人間の経済的諸関係が変化する」（傍点—山本）。

□ マルクス経済学の基本的諸範疇についての錯乱的理解ととどまることのない改ざん。

その典型は、1952年に発表されたスターリンの論文、『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』である。ここには、商品および価値についてのまったく誤った、支離滅裂な解釈が「権威的に」並べられている。価値法則についての講釈にいたっては、まさに噴飯ものである。そして、なによりも決定的なのは、「社会主義社会にも、商品があり、価値があり、貨幣があるのは当然で、われわれは価値法則を正しく利用しなければならない」という、マルクス経済学全体を完全に否定し去ってやまないほどの御託宣である。ところが、この論文が出版されるや、全世界の共産党・労働者党はひとつのこらず熱狂的支持と礼讃を大々的に展開し、「マルクス＝レーニン主義の宝庫にたいする偉大なばかりしれない貢献である」と口をきわめて賞めちぎり、担ぎまわったのである。この論文がどんなに悪質な反マルクス主義的主張でみだされているかがいまもってまったくわけわからない共産党・労働者党が掃いて捨てるほどあるということ、そしてまた、その反マルクス主義の本質を感じとることができたとしても、かつてこれを絶讃し担ぎまわったことにたいして一言の自己批判すらこの世界で聞かれないということは、これらの自称「前衛」諸党がどんなに救いがたく反マルクス＝レーニン主義的主張にかぶれているかということ、そのために全世界にわたってマルクス＝レーニン主義の真に正しい把握と宣伝がどんなにないがしろにされ、それがそのまま今日までつづいているかということ、如実に実証するものである。わたくしは、『J・スターリンによる科学的経済学の変革——スターリン著『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』の検討——』と題する論稿を、1982年12月刊行の『愛知大学国際問題研究所 紀要』第72号から1984年11月刊行の同誌77号にいたるまで、その(一)から(完)まで5回、すべて286ページを費やして発表し、このスターリン論文の内容がいかに反マルクス＝レーニン主義的曲論の集大成であるかということを徹底的に追究したのであるが、拙論そのものにたいする論評はついぞ現われず、その公刊にさいしてある種の干渉があっただけという有様であったのである。

つぎに、実践の分野で。

ハ まず第一にあげられるのは、1936年ソ連邦憲法（いわゆるスターリン憲法）を制定・發布して、ソ連邦は、いまや社会主義的労働者階級、社会主義的農民階級および社会主義的インテリゲンツィア階級から成る社会主義社会に成ったのであり、ここに「マルクス主義者が共産主義の第一段階もしくは最低の段階という、ちがった名称で呼んでいるものを実現するにいた

った」と宣言したことである。

労働者階級、農民階級および知識階級という三つの階級から成る階級社会、商品生産、価値、貨幣が存在する社会——、これを頭目スターリンは共産主義の第一段階である社会主義社会だと公言し、全世界の共産党・労働者党がこれに心からなる絶讃と歓呼の声をあげたのである！そのとき以後、ソ連邦は、名実ともに共産主義の第一段階である社会主義社会であるとの主張が絶対的にまかりとおることになった。

階級のある社会、商品生産・交換の健在する社会を社会主義社会だとする主張ほど、はじめに挙げたマルクス主義における社会主義社会の本質規定をふみにじり、愚弄するものはない。レーニンはくりかえし、「社会主義とは階級をなくすことである」と説き、この階級をなくすためには歴史的一時代にもわたる長い過渡期を切り抜けなければならないことを、十月革命からその死にいたるまで、終始一貫、極力主張し、指導層全員も異議なくこれを承服していたにもかかわらず、奸計と策謀を縦横に悪用してまんまと書記長の地位をものにした彼スターリンは、マルクスの明示している共産主義社会の本質規定も、レーニンの再三の過渡期の課題についての教示も、ことごとくかなぐり捨てて、十月革命から数えてわずか19年ののち、過渡期の過の字も口にすることなく、「階級があり、商品も貨幣もある社会主義社会」という、マルクス＝レーニン主義そのものを踏みつけにしとことん嘲弄してやまない、まやかしのものを、なんとマルクス＝レーニン主義の名において、でっちあげたのである！

ニ 社会主義的農民階級とスターリンが名づけているのは、コルホーズまたはソフオーズに組織された農民を指しているのであるが、これら集团的経営への組み入れは、頭目スターリンの常套手段である強力によって遂行されたもので、富農はもちろんのこと、中農のかなりの部分まで反社会主義的分子とされて無惨な収奪をうけ、流刑に処せられたものである。この強力的集団化は、「ひたすら説得によるべきで、強力を用いては絶対にならない」ときびしく指示しているエンゲルスとレーニンの基本方針を真に向うからふみにじるものであった。この種の非道な強力の実行使にもかかわらず、かのソ連邦憲法を發布したとき、彼スターリンは、未だ国内に私的経営者である農民が6%も残っていることを白状しなければならなかったのである。私的個人農が6パーセントも存在している共産主義社会の第一段階！

ホ 労働者階級にたいしては、苛酷なノルマを課し、スタハノフ運動とか社会主義競争とかいった美名のもとにきびしい労働強化をおしつけ、また様々の口実で罰則の強化からすすんでは規律違反の名目で容赦なく流刑に処したものである。度重なる五ヶ年計画が曲りなりにも達成され、一応の「工業化」が可能になったとみられるのは、こうした苛酷な抑圧とテロルによって労働者・農民の大衆からまきあげた大量の剰余生産物のおかげであったのである。

ヘ レーニンは傑出したマルクス主義者であり、理論の面でも人間的な面でもつねに党指導層をよくリードし、たとえ誤謬をおかした指導的党員でも、その誤謬を匡正させ、それぞれのもつ長所と才能とを活用することをみごとにやりとおしたのであるが、理論的に低劣、人間的

に魅力なく信望に欠けたスターリンは、彼自身より理論的にすぐれているか、またはより多く信望をあつめていると思われる、より優秀な指導的党員は、卑劣にも、さまざまな奸計、策略をつかって反党的分子として逮捕し、仕組んだ裁判によって流刑に処するか処刑するかしたばかりでなく、腹心の手下どもをつかって直接暗殺することまでやったのである。そのもっとも悪辣な例は、彼よりはるかにすぐれており人望の厚かったキーロフを手の者で暗殺しながら、それと時を同じくして、キーロフ暗殺事件の究明のためと称して、彼頭目の意に従わないと思われる多数の幹部党員を捕えて、流刑にするかまたは処刑するという、おどろくべき凶行をつぎつぎと演じたのである。ナチスのコンツ・ラーガーにも匹敵するような、こうした大量処刑と流刑は、マルクス＝レーニン主義をふみにじるものであるどころか、およそ社会的人間としてあるまじき悪虐非道の行為といわなければならない。

ト 党幹部（党官僚）、高級官僚層、高級軍人、高級科学者、芸術家等には、労働者・農民大衆から搾取した剰余生産物を豊富に与えて、特別の待遇をしたのであるが、これは一方からみれば、彼スターリンの独裁的地位を守るための支持層確保のためでもあった。こうして、マルクス＝レーニン主義においてきびしく定められた基本原則——官僚主義の絶滅、すべての公務は平労働者なみの賃銀によって行われるべきこと——は、完全にふみにじられたばかりでなく、ここに特別の地位待遇を保証された特権階級層を生みだしたのである。階級的区別が温存されているばかりでなく、その上に特権的上層階級をかかえている「社会主義社会」！ これこそ、マルクス主義を愚弄し、社会主義の名をかたって真実の社会主義を汚し辱めるものでなくて、なんであろうか！ このえせ社会主義社会の支配階級＝特権階級の頂点を占める者こそ、かの世紀的「屠殺者」スターリン書記長であったのである。

チ 頭目スターリンは、ソヴェト政権成立直後から民族問題にかかわったためであろうか、民族問題の最高の権威としていつのまにか全世界の共産党・労働者党の面々の畏敬の的となることに成功したが、この頭目ほど、民族問題にかんするマルクス＝レーニンの確固たる方針をふみにじて、おどろくべき諸民族の抑圧と征服、いや民族抹殺に狂奔した元凶はまたとないのである。しかも、全世界の共産党・労働者党は、この頭目をもって、反ファシズム闘争・ナチス打倒の戦いの最高の指導者＝英雄として崇め奉っているが、この男ほどファシズムを支持しヒトラーに奉仕した、醜惡な手合いはほかにはいないのである。このことは今日ではようやく明るみに出てきたが、つぎにこの醜惡な人物の所業について、ごく簡単に摘記してごらんにいれよう。

1939年8月、フランスを侵略したヒトラーを支持し、独ソ秘密協定を締結。その内容は、フィンランド、エストニア、リトアニアをソ連の勢力下におき、ルーマニアのベッサラビア南部をソ連が取得し、ポーランドを独ソ両国で分割・占領するというもので、スターリンは、その「代償」として、ソ連領土内にいる反ファシスト闘士とドイツ共産主義者の一部をドイツに引き渡したのである。この密約により、ドイツ国防軍はポーランドに侵入してその大部分を占

領したあとで、残りの部分を分け前としてソ連にゆずり、ソ連軍がこれを占領。その後数年間にソ連の併合したポーランドの領土に住む数十万人は『敵対的』または『不忠実な』分子として流刑に処せられ、ポーランド兵士にいたっては、ソヴィエト兵士によって囚人にされ、その大半は収容所内で「消え失せ」将校は虐殺された。最近ようやく世間に知られるようになった「カチンの森」だけでも 4,000 人以上が虐殺されているのである。

1939年10月、頭目の忠実な「共犯者」モロトフは、ドイツを平和を希求する国家とし、英仏を侵略者であるとの主張を宣伝。

1940年1月、ソ連赤軍はフィンランドに侵入、その領土の相当部分を奪取。

1940年6月赤軍はバルト三国を侵攻、占領して、支配下におく。その侵攻の数日後、ルーマニアに最後通牒を送り、赤軍を侵攻させて、ベッサラビア、ブコヴィナをソ連に併合。

1940年11月、スターリンは、日、独、伊三国協定に加入するための条件を述べた覚書をヒトラーに手交。その要求のあらましは、黒海から地中海に至る地帯はソ連の占めるところとする、ドイツ軍はフィンランドより撤退し、ブルガリアはソ連の支配下におく、等々であったが、ヒトラーは、これには答えず、その数日後にソ連領内への侵攻の決定を下したのである。だが、この凶悪で間抜けな反マルクス主義者スターリンは、なおもヒトラーの歓心を買うために、

1941年1月、ドイツと新しい経済協定を結び、これまで以上に大量の必需物資——小麦、綿花、マンガン、クロム、銅、ゴム、等々——をナチスに進呈したが、反対給付はゼロ。

ナチス軍隊はつづいてユーゴスラビアに侵入、さらにギリシャを侵略するが、スターリンはドイツにたいして最後まで卑屈きわまる態度を守りつづけ、国防軍を刺激しないようにけんめいにつとめ、ドイツの占領した諸国（ベルギー、ギリシャ、ユーゴスラビア）のモスクワにある大・公使館を閉鎖した（これは、ドイツの征服の明白な承認である）ばかりでなく、西部国境地帯の赤軍の配備を分散・後退させ、ドイツ国防軍の電撃戦に備えての重装備機械化を主張するすぐれた指揮官トハチェフスキーは、その他の数千の将校とともにスターリンによって、「裏切者」としてとっくの昔に銃殺に処せられたのである！

ドイツ軍攻撃の切迫を伝える確実な情報はしきりであったが、凶悪で間抜けな頭目スターリンも「共犯者」モロトフもこれにいっさい耳をかさず、

1941年6月、ドイツの対ソ宣戦布告も国防軍の進撃も、信用せず、数日たって、ヒトラーの「背信」を責める言葉を口にするのがやっとなという体たらくであった。

装備・士気ともにはるかにすぐれたドイツ国防軍の進撃はめざましく、たちまち白ロシア、ウクライナの大半を占領、モスクワ、レニングラード近くまで進出し、ソ連兵士の捕虜は200万をこえた。こうした事態は凶悪で間抜けな頭目自身が招いたものであるにもかかわらず、この頭目は、これらの兵士に後日流刑または処刑という罰をあたえたのである。

頭目スターリンや「共犯者」モロトフらのナチスへの卑屈きわまる拜跪のために赤軍は手ひどい敗北をこうむり、国土の大半は蹂躪されたのであるが、それにもかかわらず、最後にドイ

ソ軍がみじめな敗北を喫したのは、頭目や「共犯者」どもの力などによるものではけっしてない、それはひとえに、彼らによって抑圧され搾取されていたロシアの勤労人民大衆の犠牲を惜しまぬ決死的抵抗と、これに力をかしたところのロシア国土の広大さと酷寒の厳冬とによるものであることは、いわずして明らかである。それにもかかわらず、この頭目は、この戦争を「大祖国戦争」と呼ばせ、なんと彼自身、「大元帥」の称号と勲章を自分に贈ったのである！

ところで、肝心の問題は、ナチス敗北によって、スターリンのかつての盟友ヒトラーの支配から解放された東欧諸国が、この頭目の手によってどのような社会につくりかえられたか、ということである。

これらの国では、ナチスに協力したすべての資本家・地主が完全に収奪されて、全生産手段は社会のものとなり、労働者と農民の階級的区別もなくなってすべての成員は同じ労働者として社会のために働き、その労働に応じて生活手段を社会から受けとることができ、生産物の私的交換はもちろんのこと、貨幣などという前期的遺物は完全にその姿を消してしまっているという、マルクス主義によってその本質規定が正確に示されている、真の社会主義社会がつくりだされているであろうか？

とんでもない、そこにあるのは、マルクス主義によって示された本質規定をそなえた社会主義社会どころではない、その本質規定などひとかけらもそなえていない、ソ連邦と同じ醜惡な階級社会であり、労働者・農民などすべての勤労人民大衆の抑圧と搾取の上に一部の特権階層が君臨し支配している反社会主義的階級社会である。いや、それだけではない。これら東欧諸国の状態は、ソ連邦に比べはるかにみじめなものである。

まず第一に、これらの国を支配している特権階層の中核をなしているのは、頭目スターリンに忠実な、彼の意のままに動く共産党・労働者党の指導層であり、したがってこれらの国の政治経済のすべては、かの頭目の意のままに、したがってソ連邦の利害によって完全に決定されるものとなっているのである。したがって、

第二に、これらの国は、政治的には形だけの独立を保っているが、実質は頭目の国ソ連邦に従属しているのである。

第三に、これらの国を支配下にとどめておくためには、その経済力の発展はもちろんのこと、経済的自立も許してはならない。これらの国が基幹産業、とくにキイ産業において発達をとげることは厳に禁圧されなければならない。これらの基幹産業は主としてソ連邦ひとりが握り、これらの諸国は補完的な工業部門に限って、それもソ連邦自身の必要充足を第一として、発達させることが認められなければならない。

第四に、これらの国は、ソ連邦にとって特別の利益をもたらすように、対外経済関係を規制されなければならない。たとえば、これら諸国はアラブ諸国から廉価な原油、天然ガスを直接輸入することはできず、ソ連が廉価で仕入れたものを、釣りあげられた値段で買入れなければならない。

これら東欧諸国を支配する共産党・労働者党は、ひとつ残らず、マルクス＝レーニン主義の看板をひけらかしてはいるが、マルクス主義の基本原則も初歩的経済学もまったく理解していないことは、彼らが頭目スターリンの例の論文を熱狂的にかつぎまわり、また、最優等生のドイツ社会主義統一党が再度にわたって発行・宣伝している『経済学教科書』には、「社会主義社会に商品や貨幣があるのは当然である」とか、「社会主義社会では価値法則を利用すべきである」とか、頭目スターリンの口調をそっくりそのまま真似て、マルクス主義の基本原則をふみにじる主張が並べられていることによって明示されている。要するに、これら東欧諸国に実現しているのは、レーニンが厳密に規定した「階級としてのプロレタリアートの独裁」などではなく、マルクス＝レーニン主義の名をかたる、真正正銘の反マルクス主義的徒党どもの「独裁」であり、頭目スターリンがでっちあげたえせ「社会主義帝国」を構成するそれぞれの属国の特権的支配層の専制支配であり、その意味ではまさに「一味徒党独裁」というべきものである。とはいっても、この「一味徒党独裁」の事実がまったくわからず、文字面から判断して、「これら東欧諸国にあるのは、マルクス主義の主張するプロレタリアートの独裁なのである」などと、口から出まかせの雑言をはきちらす自称「学者」が「自由主義国」には掃いて捨てるほどいるというのも、また争う余地のない事実なのである。

さて、以上見てきたような骨の髄からの反マルクス＝レーニン主義者である世紀的「屠殺者」、自国の勤労人民大衆のみならず、武力で征圧した東欧諸国の勤労人民大衆すべてをも強力とテロルによる苦役の「檻」の中に閉じこめ、その忠実な輩下とともども超特権的地位を享受していたこの世紀的「背教者」が、たとえいかようにその反マルクス主義的理論と実践をば正統マルクス主義として権威的に宣伝しつつけるとしても、そしてまた、その輩下の東欧諸国の「共産主義的」支配層から全世界の共産党・労働者党の指導層全員にいたるまで、この頭目の理論と実践が真正正銘のマルクス＝レーニン主義の模範だとして絶賛しかつぎまわるとしても、その強力による支配体制そのものが、勤労人民大衆の自覚と反抗によって、早晚瓦解の運命におちいらざるをえないことは、歴史の必然であり、そしてまた実際われわれの目の前でみごとな瓦解をとげるにいたったのである。

マルクス主義理論の基本を誤りなく把握し、またそれをレーニンがいかに継承し発展させたかを正確に理解するためには並々ならぬ努力と時間が必要であるが、その骨組なりとも的確に認識することができるならば、スターリンがマルクス＝レーニン主義の看板のもとに、いかにマルクス＝レーニン主義を愚弄し、辱かしめ、踏みにじったかということも、彼がかのヒトラーに勝るとも劣らない世紀的な「屠殺者」であり、帝政ツァーを上まわる人民抑圧・殺戮の専制支配者にほかならなかったことは明々白々であるにもかかわらず、世界のほとんどすべての共産党・労働者党が、この世紀的「屠殺者」のふりまわす反マルクス主義的理論の正体を見抜くことができないばかりか、これをけんめいに絶賛しかつぎまわって、客観的には、この「新ツァー」の支配体制の存続に寄与したものであることは、いかんとも否定しがたいところとい

わなければならない。傑出した真実の人間であり不世出のマルクス主義者であるレーニンは、  
ころやさしくも、

「誤りを犯さない人が、賢いのではない。そういう人はいないし、またありえない。あまり  
重大な誤りを犯さない人、その誤りを容易に、すみやかに訂正することのできる人が、賢いの  
である。」(В.И. Ленин. Сочинения. том 31, стр. 19. 訳大月版21ページ)

と論じているのである。もし、ソ連邦および東欧の共産党・労働者党の指導者たちが真実の  
マルクス＝レーニン主義者であるならば、彼らの唱えていた「社会主義理論」のどこが正しく、  
どこが誤っていたかを真剣に検討し、その致命的欠陥をあばきだして公表し、どのようにして  
その誤謬を訂正すべきかということを見究めるために、必死の努力を傾けたはずであり、その  
深刻な自己批判の上に立って真の社会主義への道を勤労人民大衆に示し、彼らの納得を得るよ  
う、それこそ総力をあげて奮闘をつづけたにちがいない。だが、マルクス＝レーニン主義の基  
本はおろか、『資本論』の最初にかかげられた「商品」の分析すらまともに理解しえないで、  
頭目スターリンのひけらかすにせの屁理屈をけんめいにかつぎまわり、マルクス＝レーニン主  
義党の看板のもとに空っぽの威勢と特権とをほしいままにしていた無理論・無能のえせ前衛党  
に、そのようなことがどうして期待されようか。彼ら指導層の面々は勤労人民大衆を指導する  
ことなどどっくの昔から投げやりにしていたのであるが、この一大破局に当面して、なんと、  
臆面もなく、勤労人民大衆に一言の弁明すら公けにせず、さっさとその共産党・労働者党の旗  
をしまいこんでしまい、これとまったく無縁の党名を名乗ってその場を糊塗するという、浅ま  
しいかぎりの策を弄するという有様なのである。しかし、こうした反マルクス主義の本質の自  
己暴露ということは、なにも東欧諸国の共産党・労働者党にかぎったものではない。同じくり  
っぱな党名をいただくその他の諸国のほとんどすべての前衛党にしても、これまでスターリン  
論文を絶讃してかつぎまわり、「ソ連社会主義」の「偉大な成果」を吹聴し、「われわれの指  
導にしたがって奮闘してゆくならば、かならず、『各人は能力に応じて、各人には必要に応じ  
て』という共産主義社会に到達することができるのである」とその綱領の中に大書して、共産  
主義社会の人間には成れるはずもない資本主義社会の勤労人民大衆を釣るという同じ手口を弄  
していながら、ひとたび、東欧諸国の友党の支配が崩れ落ちるや、これにたいして「同志的」  
忠告をあたえるでなく、マルクス＝レーニン主義の立場からの真剣な批判と指針とを明示する  
でもなく、まるで彼らの挫折・凋落は彼ら諸友党自身の自業自得でもあるような顔をしてす  
ましているのである！ こういう現状をみれば、マルクス＝レーニン主義の看板かかげている  
全世界の共産党・労働者党が——ほんの一部の例外を除いて——かの世紀的「屠殺者」、大元帥  
スターリンのあらゆる蛮行と犯罪——マルクス＝レーニン主義のふみにじり、ソ連邦および東  
欧諸国の勤労人民すべてにたいする迫害、収奪、テロル行使から虐殺まで、等々——の遂行を、  
むしろ支えてきたものだということが、否応なしに明らかになってくるのである！

東欧諸国の相つぐ崩壊は、世紀的「屠殺者」スターリンの唱えたマルクス＝レーニン主義な



るものが真ッ赤な●●●であり、それをふみにじったきわめて悪質な反マルクス＝レーニン主義であり歪んだファシズムとまったく異ならないことを証明し、その必然的破産を如実に実証したものにはかならないが、しかし——、これら東欧諸国の崩壊をもって事は片づいたわけ●●●ではないのである。

いまや、マルクス＝レーニン主義にとっては、書記長スターリンの反マルクス主義的理論と実践をかつぎまわってきた前衛党の批判を遂行することだけが、問題ではないことを、真剣に考慮すべきなのである。いま真剣に取り組んで解決しなければならない課題は頭目スターリンとその輩下である前衛党指導者どもが多年にわたって宣伝してきた反マルクス主義的妄論の正体をあばき、真のマルクス主義の理論と実践について正確な認識をば働く人々に、いかにして把握させるかということであり、さらに、「新ツァー」の「帝国主義的支配」から解放された国々については、そこで成長する商品経済の資本主義への必然的発展とたたかって、勤労人民大衆が、主体として、いかにして真実の社会主義への道を切りひらいてゆくべきか、ということとを明らかにするである。

頭目スターリンの悪虐無類の言動とその取り巻き＝前衛党指導層の追従のおかげで、何千万人の尊い犠牲にもかかわらず、世界史の進展は阻止され逆行さえよぎなくされたが、現在の事態のもとでは、再び前進の道をすすむことは望みすくない。というのは、マルスク主義の基本原則を正しく学びとって身につけることは至難であって、長期にわたる精励・刻苦が要求されるために、それに耐えて努力を重ねることを苦手とする者も圧倒的に多く、そのうえ、今日前衛党の指導者といわれる面々は、スターリンの反マルクス主義理論を暴露することもせず、かつてこれのかついだことの自己批判もおこなわないという有様であるからである。物見高い「論客」のなかには、「ベレストロイカ」という曖昧な言葉をひけらかしている大統領ゴルバチョフが具合よく收拾するであろうとの予想を説いている向きもあるが、もともと「スターリン理論」を忠実にのみこんで高級党官僚に成り上ったノーメンクラトゥラの一員である。彼が「ベレストロイカ」を思いついたのは、その特権階層の存立そのものが危ぶまれるほど、「新ツァー帝国」の内外に山積する諸矛盾が激化し、階級闘争が重大化してきたからである。彼が、マルクス経済学についてまったく無知であることは、「市場経済」などという、ありもしない「経済」を説いていることひとつで実証されているし、また頭目スターリンと同じ性向の持主であることは、バルト三国の独立を推進するどころか、これを武力をもってでも禁圧することを辞さないという一事によって疑う余地なく実証されている。現在の事態のもとで彼のなしうることは、無理論のまま商品経済の自然成長的発展に追従し、その資本主義への転化・発展によって生産力の発展を図るという、古くからの道にロシアを導きいれ、客観的には、アメリカ帝国主義の後塵を拝する資本主義国ロシアを生みだすこと、これひとつであろう。

#### 4. 俗物的思考の特徴を示す典型的事例

これまでのつたない論究によって、この拙稿の要旨は、賢明な読者諸君にはすでに了承されることができたと思われるので、それについての結論はこの拙稿の最後の要約において示すこととし、ここでは、「東欧大変動」を「マルクスの誤算」に結びつけないではいけないような、世にも特異な思考様式というものが、歴史学者と称される人物の堅持するところとなったことについて、その一般的な思考性向というものの特徴を、いささか究明しておきたいとおもう。

##### イ) 歴史的発展法則についての無知と無理解

林氏は、マルクス主義を非難・攻撃するために、マルクスの著作を引き、その中に出てくる用語——厳密に言えば、特定の概念——をあげ、それらをつかって、マルクスの「誤謬」なるものの論証に精を出している。つまり、それらの概念を認めたうえで、その概念をつかって論難しているのである。だから、そのためには、まず、それらの概念の意味内容を、マルクスの説明にしたがって、とらえておかなければならないことは、中学生にでもわかるようなことである。氏が再度にわたってその名をあげている『経済学批判』の「序言」の中に示されている「唯物史観の定式」は、いうまでもなく、人間社会の歴史的発展法則を明らかにし、その法則にしたがって、人間社会が原始共同社会、奴隷制社会、封建制社会、資本主義社会とという順序で変革＝移行をとげてきたことを明らかにしたものである。そして、ひとつの歴史的社會——厳密に言えば、歴史的な経済的社会構成体——は、生産力と生産関係との矛盾によって必然的につぎの、より発展した生産力に対応する、より高い生産関係を土台とする社会に変革＝移行しなければならないことをはじめて解明したものである。ところで、これまでの人間社会の変革＝移行には、どれだけの期間と発展過程が、つまり一つの歴史的社會の基本的生産関係のもとで生産力が発展し十分に成熟して、その発展した生産力と生産関係との矛盾がさまざまな面において露呈し、人間がその生産関係を変革しなければならないことを十分自覚してその変革を遂行するまでには、そして、その古い生産関係を変革してより高い生産関係の土台の上に、それに対応した「法律のおよび政治的上部構造」をうちたて、それにまさしく照応した新しい「社会的諸意識形態」が完成して、そこにりっぱにその内容をととのえた新しん社会が現出するまでには、いったい、どれほど長期にわたる歴史的時期が必要であると考えなければならないであろうか？ 林氏は歴史学者だそうであるから正確に知っているはずだが、まったくの素人であるわたくしでも、原始共同社会は数千年の期間、奴隷制社会と封建制社会——この両者の区別はむずかしいが——はそれぞれ千年か、少なくとも、七、八百年かの間存続しなければ、つぎのより高い歴史的社會がそこに現出しえなかったものであることがわかる。

ところで、資本主義社会はそのもっともはやく生まれたイギリスでも精々のところ 300 年（名譽革命）ないしは 200 年（ミュール紡織機）を経ただけで、その他の資本主義国にいたっては、その体制確立ははるかに遅く、しかもイギリスにくらべて封建制社会の遺物をおびたたく抱えているのが現状である。林氏は、ほとんど毎ページ「共産主義国」とか「共産主義体制」とか書きたてているが、いったい、この「共産主義体制」というのは、マルクスが「唯物史観の定式」の中で明示しているような、資本主義社会の次ぎに来るべき歴史的な経済的社会構成体としての共産主義社会を指していったもののなのか、それともこの厳密な規定はわけわからず、皆さんがそう名づけて言っているから、自分もそれを共産主義体制とも、共産主義国とも呼んだのであるというのか、はっきり答えてみるがいい。それらの国が自分でそう名付けているからとか、皆さんがそう名付けているからそれで自分もそれを「共産主義国」とか「共産主義体制」だとか呼んだのだ、というのでは、歴史学者の名前が泣こうというものである。もし、その名に値する歴史学者であるならば、それぞれ異なった歴史的社会的人間は互いにまったく違ったものだということ、わかりやすくいえば、封建制社会の人間は資本主義社会では生きられないし、資本主義社会の人間は封建制社会においては生きられないということは、たやすく理解しているはずである。資本主義社会で個人主義・利己主義を身につけて貨幣をより多くふところにいれること、他人をけおとすのはもちろんのこと、自然破壊でもなんでもやっつけられるという手合いは、「一人は万人のために」という、真の社会的人間としての意識を体得した人間だけから成る共産主義社会では、一日たりとも生きてはいけけないのである。ところが、林氏がくどいように言って聞かせる「共産主義体制」下の「共産主義国」の人間は、一人のこらず、その社会的生活様式といい、意識諸形態といい、資本主義社会の人間とほとんどまったく同じか、またはそれよりもさらに前期的社会的人間に近いものまでであるのである。こういう人間で構成されている社会をとらえて、「いや、名称が共産主義国というのだから、それはマルクスのいう共産主義社会にちがいない」と主張する歴史学者がいるとすれば、その人間は、まともな科学者としては誰からも相手にされなくなるはずである。

「人間は常に歴史をふりかえることなしには生きてゆけないものである」（27ページ）とは歴史学者林氏のgori-bana言葉であるが、「ロシアのように後れた国でなぜ革命が起きてそれが勝利したか」ということについてのレーニンの懇切丁寧な教示の文章も、「しかし、ロシアのようにおくれた国が社会主義に到達するのは先進国に比べてはるかに困難であり、ソヴェト・ロシアはいまやと過渡期の第一歩を踏みだしたにすぎないのだ」という、レーニンの的確な解説の文字も、まったく読みとることなく、またレーニンのこれらの教示がロシアの客観的状态を正しく把握したものであるかどうかということも、歴史的事実に照らして検討することなど、いっさいほったらかして、ロシア革命は、マルクスの社会主義革命とは違ったものではないとか、ロシア社会主義革命によって生まれた社会は社会主義社会でもあり、それは共産主義社会ともいえるものだ、という、論証なしの独断をくりかえし述べたてているような人間が、

はたして歴史学者の名に値するであろうか？

## ロ) マルクス理論の完全無欠な没理解

林氏は、専門の歴史的研究の方は、以上みたように、まことに粗末なものにとどめておきながら、さて専門外の経済学の分野に入りこんで、あくまで「疑似宗教としてのマルクス主義の破綻」を論証しようとけんめいの態である。だが、これはまた、お気の毒にも、マルクス経済学のイロハすらわけわからないという実態をひけらかすだけの効果しかもたらさないものである。氏は、再度『資本論』という書名を挙げて、さも自分はその内容を完全に理解しているかのように装っているが、それについておしゃべりをすればするほど、その内容は完全にわかっていないばかりでなく、これを歪めて解釈することしかできないという事実がますますあらわに示されるという結果になっているのである。そこで、こころみに、『資本論』について氏の主張するところを簡単に見てみよう。

「マルクスは彼の『資本論』によって資本主義没落の必然性を示したと称するが、それが如何にして生ずるかについては「収奪者が収奪される」というような抽象的なことしか言わなかった。そこでその「収奪」の実践はレーニンに委されたのであるが、マルクスは近代工業によって生み出された「プロレタリアート」はすべての搾取をなくし人類を最終的に解放するという「歴史的使命」を帯びていると言ったのであるから、そのプロレタリアートの政党が政権を掌握し、一党独裁の政治を行うことはその実現であると言える。そしてマルクスは財産の私有の中にすべての悪の根源を見たのであるから、国家が土地と産業のすべての所有者となり経営者となることもまた当然のことであった」(31ページ)。

諸君、よくお聴きいただきたい。林氏によれば、マルクスは資本主義の没落の必然性を示したと称するだけで、その必然性がいかんして生ずるかについては、「収奪者は収奪される」というような「抽象的なこと」しか言わなかった、のだそうである。いや、まことにごもっともなことである。マルクスの全三巻の体系的叙述のなかにこの「収奪者は収奪される」という文字しか読みとれなかったのは、当たり前なのである。なぜならば、理論的素養もなく、論理的思考力にも欠けている俗物にとっては、『資本論』の厳密な科学的な概念規定は、その一つですら、まともに理解できないからである。そのことを如実に実証しているのは、歴史学者林氏が得々として並べたてているつぎの二つの口上のうちの私がゴシック体で示した用語である。

「……依然として**肉体労働のみを価値**として理論的に崇拜する社会主義社会……」(25ページ)。

「……マルクスは**財産の私有**の中にすべての悪の根源を見た……」(31ページ)。

まず「**肉体労働のみを価値とし**」という文句が示しているのは、マルクスの価値概念ひとつがまったくつかめていないこと、『資本論』の最初の一ページすら正確に読む能力もなく、既成の「労働価値説」というあいまいな用語から思いつくという、まったくの俗物的思考しか持ち合わせていないことである。「労働を価値とする」というようにマルクスが説いていると考

えるこの逆立ちした頭脳をもってしては、『資本論』は一ページといえども、その意味は読みとりえない。それゆえ、こういう俗物にはとりわけジョッキングに響く「収奪者は収奪される」という文句しかその目に入らないのは当たり前なのである。

つぎに「財産の私有」という言葉ほど、マルクス主義理論の基本である唯物史観についての、またおよそマルクスが用いるいっさいの経済学的概念——厳密には、経済学的範疇——についての完全な没理解と俗物的思考癖とを如実に実証しているものはない。この「財産」という言葉をマルクス主義理論にあてはめてあれこれもっともらしいことを論じたてる手合いは、そのこと一つだけで、マルクス主義理論とはまったく無縁であり、逆立ちしてもそのひとかけらも理解できないものだということを、ごていねいにも世間に示してくれているのである。「倨傲」などというわけわからない、こけおどしの用語にかぶれている硬直した頭をすこしほぐして、ひとつ自分の身の周りを見回してみたまえ。君が着ている衣服は君だけの私有財産だ。君がいま食べている飲食分は君の私有する財産だ。その財産の私有を廃止することがどうしてできようか。衣服や飲食物を私有して私自身が消費することの中に「すべての悪の根源を見た」なんて、よくも正気で言えたものである。社会主義になろうが共産主義になろうが、衣服や食料品といった財産の私有、つまり私的・個人的処分が変わるはずのないことぐらい、小学生にでもわかることである。賢明な読者諸君にはすでによくおわかりのところであるが、わが歴史学者は、Eigentum というドイツ語——林氏はドイツ史の専門家だそうである——をマルクスがどのように厳密に規定しているかがわけわからないのである。これでは、かの「唯物史観の定式」の意味がさっぱりわけわからず、けちをつけるのが精いっぱいというのも当然である。Eigentum とは「所有」ということ、厳密正確に言えば、生産手段の所有ということである。所有という言葉がわけわからない手合いには、マルクスの用いる経済学的用語、つまり経済学的範疇は、ひとつとして、逆立ちしてもわからないし、したがって『資本論』などのような厳密な概念規定の展開から成る体系的労作は、何十回読んでもわからずじまいになるのも当然なのである。

ところで、『資本論』を読んで、資本主義の没落の必然性についての説明としてたったひとつ、「収奪者が収奪される」という文句しか見出すことができないと告白するわが歴史学者林氏は、ひとりで、かつてロシアでナロードニキの指導的理論家として鳴らしたエヌ・ミハイロフスキー（Н. Михайловский）が、いまからおよそ一世紀むかしにマルクス『資本論』にたいして展開した「批判」と、これにたいして答えたレーニンの懇切な論評とを、われわれに思い出させてくれる。紙幅が限られているので、残念ながらミハイロフスキーの「批判」の文章はここにかかげられないが、これにたいするレーニンの論評から引用してかかげることにしたつぎの二つのパラグラフを一読していただければ、ミハイロフスキーの「批判」にくらべて、その百年後にわが歴史学者が公表した「批判」が、くらべものにならないほど杜撰きわまる安手の、『資本論』の中の文字を読むことすら倏約した成果だということが、よくわかるはずであ

る。

『『マルクスは、『資本論』のなかで論理の力と博識の結合の手本をわれわれにあたえた』——と、ミハイロフスキー氏は言う。[ついでながら、わが林氏は、「マルクスは『資本論』という博識の経済学の未完の大著」しか残さなかったと大書しておいでなのである。]ミハイロフスキー氏は、この文章のなかで、りっぱな言葉と空虚な内容との結合の手本をわれわれにあたえた——と、あるマルクス主義者は批評した。そして、この批評はまったく正しい。実際に、マルクスのこの論理の力[これは、わが歴史学者の目にはとうていはいらなかったものである]はどこにあらわれたであろうか？ その論理の力はどのような結果をあたえたであろうか？ さきに引用したミハイロフスキー氏の長談義を読むと、この論理の力の全体はもっとも狭い意味での「経済理論」にむけられている、と——そして、それだけにすぎないのだと、考えられる。そして、マルクスがその論理の力を発揮した範囲の狭かったことを、より強く描き出すために、ミハイロフスキー氏は、「きわめて小さな細目」とか、「綿密さ」とか、「だれにも知られていない理論家」とか、等々を強調する。これだと、まるでマルクスは、これらの理論の構成方法のなかに、本質的に新しい、注目に値するものは、なにも持ちこまなかったかのようになるし、また、経済科学の範囲をひろげもせず、この科学そのものに「まったく新しい」見解を持ちこみもせず、経済科学の範囲をいままでの経済科学者の場合とまったく同じままにしておいたことになる。ところが、『資本論』を読んだ人ならだれでも、これはまったく間違いであることを知っている。この点について、ミハイロフスキー氏が16年まえに卑俗ブルジョア的なユ・ジュコフスキー氏と論戦をおこなったときにマルクスについて書いたことを思い出さないではいられない。当時はおそらくいまとは時代も違っていたろうし、おそらく感情ももっと新鮮であったであろう。だが、とにかく、ミハイロフスキー氏の論文の調子と内容だけは、いまとはまったく異なっていた。

『『この著作の究極の目的は近代社会の発展法則（原文では das ökonomische Bewegungsgesetz——経済的運動法則）を明らかにすることにある』——K. マルクスは彼の『資本論』についてこう述べて、彼の計画を厳格にたもっている』——ミハイロフスキー氏は1877年にはこう批評している。それで、この厳格に——この批評家のみとめるところによれば——たもたれた計画を、もっとしさいに検討してみよう。その計画とは、「近代社会の経済的運動法則を明らかにすること」にある」(В. И. Ленин, Сочинения. том 1, стр. 117. 訳大月版127—128ページ)。

ごらんのように、『『収奪者が収奪される』』というような抽象的なことしかいわなかった』とか『資本論』という博識の未完の大著を残したとか偉そうに公言しているわが歴史学者が、いまから113年もむかしにロシアの一ナロードニキ評論家がまともに読みとることができた文字すら、その目にまったくはいらなかったとは、いったい、どういう種類の学者であろうか！

書かれてある文字をまともに読むことすらできない無能の歴史学者にくらべるならば、はるかに正確に文字を読める目をそなえていた一世紀前のナロードニキ評論家にして「惜しくも」

理解できなかった右の「究極目的」の厳密な意味について、レーニンは、その奥深い内容を、かの「唯物史観の定式」と結びつけて詳しく説明してくれているのであるが、このことはわが歴史学者の理解の範囲をはるかに超えることであるので、ここでは割愛することにして、マルクスの書いた文字を正確に読む能力と心がけをそなえている人ならば、真剣な学習によって『資本論』の中に述べられている科学的な理論体系の骨組みをただしくとらえることができるということについて、レーニンが懇切かつ的確に説明してくれているところを、つぎにかかげておくことにしよう。ここに述べられていることは、ひとつ残らず、わが歴史学者の目にはうつらなかったもので、すべては『『収奪者は収奪される』』というような抽象的な文字に「収斂し」てしまっているのである。

「ところで、マルクスは、1840年代にこの仮説〔唯物史観〕を述べてから、材料の事實的（このことに注意せよ）研究にとりかかっている。彼は一つの經濟的社會構成體——商品經濟制度——をとって、膨大な資料にもとづいて（この資料を彼は25年以上も研究したのだ）、この構成體の機能と發展との法則のきわめて詳細な分析をあたえている。この分析は、社會の成員間の生産關係にだけ限定されている。マルクスは、問題の説明のために一度もこの生産關係の外部にあるなにかの要因にたよることなしに、社會經濟の商品的組織がどのようにして發展するか、その組織がどのようにして資本主義的發展組織に轉化し、ブルジョアとプロレタリアートという敵対的な（すでに生産關係の範囲内で）階級をつくりだすか、その組織は、どのようにして社會的労働の生産性を發展させ、そして、まさにそのことによって、この資本主義的組織そのものの基礎と和解しえないまでに矛盾するようになる一要素をもちこむか、ということを知る可能性をあたえている。

これが『資本論』の骨組みである。だが、重要な点は、マルクスがこの骨組みだけでは満足しなかったこと、彼が普通の意味での「經濟理論」だけにとどまらなかったこと、彼が——ある社會構成體の構造と發展とをもつぱら生産關係によって説明しながらも——それにもかかわらず、この生産關係に照応する上部構造を、つねに、そしていたところで、追求し、この骨組みを肉と血とでつつんだことにある。このためにこそ『資本論』はきわめて巨大な成功をおさめたのであって、そこで「ドイツの經濟学者」のこの著書は、資本主義的社會構成體を、生きた構成體として——すなわち、日常生活の諸側面や、この生産關係に固有な階級敵対の實際上の社會的現われや、資本家階級の支配を保護するブルジョア的な政治的上部構造や、自由・平等、等々のブルジョア的觀念や、ブルジョアの家族關係をともなった構成體として——読者に示したのである。ダーウィンと比較することがまったく当をえていることは、いまや明白である。『資本論』——これはまさに、「モン・ブラン山ともいうべき多量の事實資料に仕上げをあたえる、いくつかの、相互にきわめて密接に関連した、概括的な觀念」（これは、ミハイロフスキー氏の言葉である）にほかならない。そして、もしだれかが『資本論』を読んで、この概括的な觀念に気づけなかったとしても〔もちろん、わが歴史学者は気づけなかった！〕。それは、もは

やマルクスの罪ではない。彼は、さきに見たように、序文のなかですら、これらの観念について指摘しているのである。……………」(ibid. tom 1, CTP. 123-124. 訳大月版 134-135ページ, 傍点レーニン)。

マルクスは「龍大な事実資料を、一面では自分の経済理論を基礎づけるために、一面ではその理論を例解するために、掘りかえしたのである」が、ダーウィンの全労作が示している「モン・ブラン山ともいふべき多量の事実資料に仕上げをあたえる、いくつかの、相互にきわめて密接に関連した、概括的な観念」は、マルクスの労作のどこにもない、と「批判」したのは、いまから113年前(!)のロシアのナロードニキ、エヌ・ミハイロフスキーであり、この「批判」の文言をそのまま採って、彼の読み方のずさんさと理解力の欠如を懇切丁寧に——上に見たように——解き明かした不朽の労作『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者〔マルクス主義者〕とたたかっているか』(1894年)を著したのは、当時弱冠24歳のすぐれたマルクス主義者、レーニンそのひとであった。ところが、それから一世紀もの長い時間のうちに現われた一歴史学者は、『資本論』の中味はろくすっぽ読まずに、上に引用して示したような、まったく空虚な詭弁で『資本論』をやっつけたつもりになっているのである！これこそ、まこと倨傲の俗流歴史学者たることを告白しているものではあるまいか！

マルクス主義の理論体系を、とりわけその核心をなす『資本論』全三巻の内容を正確に把握することは、たとえどんなに集中して、また長い月日をかけて真剣に努力したとしても——レーニンのようなまさに不世出の人間を除いて——その全き理解を得ることはきわめて骨の折れることであり、ほんの少しずつ理解を深めてゆくことができれば上出来である。大方のマルクス主義者は、生半可な、反マルクスの解釈を並べたてて得々としている体たらくである。価値というもっとも重要な基本的概念について精確な理解をもっている学者が、はたして何人いるであろうか？ 世間的に有名なP.M. スウィージーにしても、わが宇野弘蔵氏にしても、決定的に重要な「形態規定」という言葉ひとつをも全く知らないし、それがどんなことを意味するかもわけわからずである。それはちょうど、定石という言葉も、また定石がどんなものかもわけわからない手合いが、「わが輩は立派な高段者である」と広告しながら、手のつけられない、でたらめな碁をうっているのとまったく同じである。私の見るところでは、マルクス主義者とかマルクス経済学者とかをもって自任している者はそれこそ掃いて捨てるほどいるが、そのなかで、マルクス主義の哲学的基盤の正確な把握にもとづいて『資本論』の中に展開されている「モン・ブラン山にも比すべき」理論体系についてその内容を的確・厳密に理解して自分のものとしている真実のマルクス経済学者としては、世界広しといえども、残念ながら、名著『マルクス・レキシコン』全15巻を著した久留間鮫造氏を措いてほかに一人もないと考えられるが、それは久留間氏が、ヘーゲル哲学とこれを正しく揚棄した唯物弁証法との精確な理解の上に『資本論』の内容を把握されたからである。わが歴史学者林氏は、「人間の自己疎外」(34ページ)などといったヘーゲルかぶれの迷語をあやつっていかにもヘーゲル哲学に通じている



ような体裁を装っているが、「人間の自己疎外」などといった珍現象がどんなものか、説明できたら言うてみるがいい。さきの「肉体労働のみを価値としている」とこの「人間の自己疎外」という迷文句とを並べてみるだけで、林氏がマルクス経済理論のもっとも基本的・初歩的概念である「価値」について完全に無知・無理解であることが実によくわかる。「労働を価値とする」古典学派をこそマルクスは批判したのだが、このことひとつわからないで、マルクスは「労働を価値としている」とは、またよく言えたものである！

## ハ) 資本主義社会の本質についての驚くべき無知とその俗物的粉飾

わが歴史学者林氏は、マルクスの「唯物史観の定式」は誤りであると再三述べているようであるが、氏自身、原始共同社会から奴隷制社会に、さらに封建制社会から資本主義社会へどのようにして人間社会が変化・発展したかについては、マルクスの説の「矛盾」を云々するだけで、自分自身、このような歴史的諸社会の区別を認めるのかどうかは明らかにしていない。

林氏は「唯物史観」は誤りだとするのであるから当然に右のような人間社会の歴史的発展段階は認めず、また一社会からより高い歴史的な社会への変革・移行についても、マルクスとは違った考え方をもっているにちがいないと思われるが、そうした異なった見解を明確におしだしてこそ、マルクスの「唯物史観」の「決定的誤謬」を明らかにすることができるし、いやしくもマルクス主義を「宗教」として攻撃する歴史学者であるならば、当然にこれを明示すべきであるが、それにもかかわらず、これについて一言も自説を明示しようとしていないのは、科学を云々する学者としてはあるまじき卑劣な論法を弄するものといわざるをえない。

しかし、よく考えてみると、林氏が、確たる史観ももっておらず、社会の歴史的発展法則についても俗物的表象以上のなにものをも持ち合わせていないことは、「完全な自由主義国家への変身」(36ページ)とか、「国家による計画経済をやめて市場システムに依拠する自由企業制に転化するより外はない」(36ページ)とか、「社会主義から自由主義への転換も比較的行われ易い」(36ページ)とかいう、氏の並べたてた文章を見ることによって、容易に判断されるのである。

そもそも「自由主義」などといった経済的社会構成体、やさしくいって社会制度などはどこにもないのである。自由主義という術語は一国の外国貿易において輸入品にたいして関税を賦課しないという、政策体系にのみ用いられたものである。経済学に無知な俗物は、社会の側からの当然の規制すらまったく排除して自由勝手な振舞ができることを自由主義と称していてもやしているようであるが、これは人間社会を構成する要素としての人間個人のあり方についても、また、資本主義社会での「自由」なるものの実態についてもまったくわけわからずに「自由」という言葉をひねりまわしているだけなのである。

わが歴史学者林氏は、資本主義社会を目して「自由主義」と呼んでいるのであるが、その「自由」の経済的意義については、てんで無知でおいでなのである。資本主義社会で「自由」

を保障されているのは、大切な人間様どころではなく、死んだ貨幣様であり、資本様であることぐらい、まったく知らない中学生が一人でもいるだろうか？

お金があれば、それによって、なんでも、広い土地でも豪勢な邸宅でも、快適なリゾート・マンションでも、いや生きた人間様をいくらでも、またどのようにでも自由にする事ができるが、お金のない人間様は、生きる自由すらなく、ただ飢える自由があるだけである。貨幣様が完全に全能であって、人間様はこれに翻弄されふりまわされるみじめな奴隷でしかないという、この「自由主義」の権化たる貨幣様の本質については、歴史学者林氏は当然知るはずもないが、いまから400年もむかしに、傑出した不世出の劇作家、W・シェークスピアが、その作品『アセンズのタイモン』の中で、芸術的にもの見事に喝破しており、後年唯一の科学的貨幣理論を確立したマルクスとその達眼のほどを競っているのであるが、ケインズやその他の俗流経済学者一同と同じく、歴史学者林氏も、このシェークスピアのつぎにかかげる名せりふの科学性については、あわれにも完全に無知・無理解なのである。

「何だこりゃ？ 黄金？ 黄色い、ざらざらする、貴重な黄金じゃないか？…………… こいつがこれくらいありゃ、黒も白に、醜も美に、邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇に変えることができる。え！ 神様たち！ なんと、どうです？ ……これがこれくらいありゃ、神官どもだろうが、おそば仕えの御家来衆だろうが、みんなよそへ引っぱってゆかれてしまいますぞ。まだ大丈夫という病人の頭の下から枕を引っこぬいてゆきますぞ。この黄色い奴めは、信仰を編み上げもすりゃひきぢぎりもする。忌わしい奴を有りがたい男にもする。白癲病をも拝ませる。盗賊にも地位や爵や膝や名誉を元老なみに与える。古後家を再縁させるのもこいつだ……やい、うぬ、罰あたりの土くれめ、どの人間をも魅惑して、諸国の無頼漢の争闘種を蒔く淫売め。」(坪内逍遙訳『アセンズのタイモン』、130-132ページ)。

それから400年経って、林氏が誇らしげに自慢する「自由で豊かな生活を送るいわゆる資本主義国」(28ページ)にいたって、この全能の貨幣の人間支配力をはるかに強大なものになり、資本となって勤労人民大衆から莫大な不労所得=剰余価値をまきあげつづけるだけでなく、社会生活全体をも、いや人間社会の存続そのものをも左右するほどの「独裁者」にのしあがっているのである。歴史学者林氏の史観によれば、人間社会は最高峯としての「自由主義社会」に帰一すべきものとされているようだが、なるほど、世界最大の「金満国」といわれる「日本自由主義国」での、全能の貨幣と資本の享受する自由ほど、古今東西を通じて強大なものではなく、そのおかげで、ありとあらゆる自由がふるくから支配していたのである。

大臣とか、その他のさまざまな奴隷制の昔からのかびの生えたような名称と地位が、この近代的と林氏の断言する「君主国日本」では、いまもって幅をきかすという「自由」が保証されている。それらの手合いは、「米鬼英賊」と罵声高く、国民を侵略戦争に駆り立てる「自由」も、負け戦でぶざまな降伏のあとではその「米鬼」様の仰せのままに御奉仕申しなげる「自由」も保証される。「君主国日本」を支配するそれらの奴隷制いらいの手合いのそれにぴったり対応し

て、兵士は中国その他の諸国の人民を数百万も殺戮し劫掠するという「自由」も、負け戦となるや、東欧諸国の人民が強力なナチス軍隊にたいして、生命を賭して最後まで抵抗の死闘を遂行したこととはおよそ縁遠く、抵抗を考えたものは一人もなく、部隊長が真っ先に官給品を馬に満載してさっさとずらかったというほど、自分の御身だけを守る、文字どおりの「自衛兵」に徹するという「自由」を、沖縄で婦女子を先に殺すという、東欧諸国の人民とは隔絶した、非人間的的存在であることを実証する「自由」を、保証されていたのである！

こんにち、この世界最大の「金満国」＝「天皇制国家＝日本」と称せられる資本主義国において、全能の貨幣と資本の享受する「自由」の、なんと広大無辺であることか。有毒廃棄物を海に垂れ流して数万人を殺し数十万人を傷つける「自由」や、多数の賃銀労働者を劣悪な賃銀で機械の付属物としてこき使って巨億の剰余価値を搾りあげる（鎌田慧氏の名著『自動車絶望工場』を見よ）とか、同じく賃銀労働者をとことん搾りあげ、きれいな海をヘドロで埋めつくしながら、まきあげた莫大な剰余価値で私欲を満たすとかいった「自由」は、まだとるにたりないほうである。国民の生存を支えている広い海、山、河川を荒らし、かけがえのない水を救いようもなく汚染し、農薬漬けの遊興場（ゴルフ用地）で自国の山野を埋めつくすという「自由」から、開発途上国の熱帯林を掃滅させ、砂漠化を押し進めてまでしてこたえられない利潤をふところにいれるという「自由」まで、保証されている。林氏は、「ハイテク」とか「情報化社会」とかいった流行語をひけらかしている（28ページ）が、これらはみな全能の資本にとっての便利な小道具でしかないのである。「金満国」日本で、全能の貨幣と資本が享受する「自由」がどんなに浅ましく人間殺戮的極致にまで拡大されているかということは、二酸化炭素とフロンガスの排出を厳重に制限してこのかけがえのない地球を守ろうという、世界中の人民すべての切なる願いをふみにじって、最後まで、その放出の「自由」を固持しているという一事によって、この上なく明確に示されているのである。

「ソ連が唯一の帝国主義国である」（12ページ）と書きたてて、世界最大・最強の覇権・帝国主義アメリカを帝国主義国から「除外」する林氏こそは、キューバを除く中南米を支配しているアメリカの資本とC I Aの存在を隠蔽する「自由」をただひとり享受しているもので、まさに「自由主義」擁護・宣伝の先頭に立つ旗手としての貫録を示したもののほかないものである。

## 簡 単 な 要 約

賢明な読者諸君は、林氏の論説についてこれまで私が拙い筆をもって縷々説明してきたところによって、事態の本質はすでによくおわかりのこととおもう。それはまことに簡単なことで、要するに、日頃マルクス主義を快く思わず、なんとかこれをやっつけたく思いながら、その理論的誤謬を明らかにした論文も書けず、反ってマルクス主義を学びとっている人々から批判されて反駁のしようもないような論文をば少々書くことしかできなかったような——マルクス＝

エンゲルスも、レーニンも、われわれが一生かけても正確に理解するのがむずかしいほど、数え切れないぐらい多くの真に高い科学的価値をいまなおもちつづけてている素晴らしい労作をつくりあげているのである——通称学者の一俗物が、かねてから「社会主義国」とか「共産主義国」とかうたわれ、マルクス＝レーニン主義の旗をかかげていた——旗をかかげることほどやさしいことがあろうか、「米鬼英賊」と「自由主義掃滅」・「国家主義」の旗をふりまわしていた「皇国日本」は、いまは、「親米・追従」・「自由・民主主義」の旗をけんめいにふりかざして、例の「自由」を守りたてているのである！——東欧諸国とソ連の体制が総崩れになるのをみて、まさに天与のチャンス到来と躍りあがったものである。この機を逸して、マルクス主義駁撃を成しとげることができようか。東欧諸国の体制の崩壊こそ、まさに明白なマルクス主義の敗北ではないか。東欧諸国もソ連も、マルクス主義によって、マルクス主義の基本原則にしたがって建設され、まさにマルクス主義そのものを具現したものではないか。これらの国がみじめにも崩壊したことは、マルクス主義がもろくも瓦解し、打倒されたということである、——といった攻撃論文を書きあげるためには、マルクス主義とはどういうものか、東欧諸国とソ連とはどういう特徴をもった社会体制なのかということについての正確な知識も、不正確な知識もまったく不要である。ただひとつ、「それらの国はマルクス主義に則して建てられた共産主義国である」という、ジャーナリズムの慣用文句ひとつを呑みこみさえすればいいのである。つまりそれだけの、簡単な俗物的表象ひとつだけを元手にし、それだけにしておいて、あとはなんの説明もなしに「倨傲の宗教」という貼札をペタンとマルクス主義の名前の上にはりつけておくだけにしておけばよかったのである。

ところが、日ごろ学者先生と奉られている習癖は根強く、ありもしない「学者的権威」を誇示しようとして、読みもせず分かりもしないマルクスの著作や「ヘーゲル流」の文句などを引合いに出したばかりに、自分自身の脳中にあるのは、これらについての完全無欠な無知・無理解と、その上論理的思考力の全き欠如だということを、——これまでつぶさにみてきたように——天下にひろく告白して下さるという、貴重な結果を生むことになったのである。それゆえ、「マルクスの誤算」と題してマルクス主義の破産を広告しようとたくらんだ論説は、まことに皮肉にも、著者自身の、マルクス主義のみならず一切の科学的理論についての無知・無理解を暴露したばかりでなく、東欧諸国やソ連をマルクス主義の具現とみなした氏自身の誤算と、ジャーナリズムから安手で仕入れた俗物的表象——だが、さすが、ジャーナリストは「マルクスの敗北」とは書かなかった！——だけに頼って真に科学的な理論体系であるマルクス主義を撃滅できるとして図ったという、氏自身のぶざまな誤算をも、はっきりと浮かびあげらせてくれているのである。まともな論証ひとつも示しえないで、「倨傲の宗教」というたいそうな文字をぶつけるだけで自らの誤算を<sup>とうかい</sup>韜晦するとは、また、なんという、「自由」な「学者」であろうか？ 「倨傲の俗流学者」とは、まさしくこうした俗物（Philistine）にお誂え向きの文字ではあるまいか？

(Sept. 18, 1990)